A TREASURY OF WORLD LITERATURE

世界の文学

23

ゾ　ラ

ジェルミナール

世界の文学　23　©1964

ゾ　ラ

訳者　河内　清

昭和39年5月1日初版印刷
昭和39年5月12日初版発行　価390円

発行者　宮本信太郎

本文整版印刷　三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷　求竜堂印刷株式会社
口絵印刷　東京プロセス株式会社
本文用紙　三菱製紙株式会社
クロス　日本クロス工業株式会社
製函　加藤製函印刷株式会社
製本　協和製本株式会社

発行所　中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代)振替東京34

目次

ジェルミナール　3
解説　482
年譜　496

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongboo

ジェルミナール

第一部

一

坦々とひろがる平野、星影もなく、インクを厚く塗りこめたような暗闇の中を、マルシエンヌ（フランス北西、ノール県の郡役所所在地）からモンスー（アンザン付近の架空の炭鉱町）に向かう大道にそって、男がただひとり歩いていた。道は十キロにわたってまっすぐに甜菜畑の間をつっきる舗装路だった。男の前には黒い土さえ見えず、広大な地のひろがりは吹きよせる三月の風でしか感じられなかった。突風は洋上の風のように大きく、数里にわたる沼沢地や赤裸の地面をかすめて冷えきっていた。空には一本の立ち木の影さえにじまず、道はただ茫々と視界をさえぎる闇の真ん中に突堤のようにまっすぐにのびていた。

男は二時ごろマルシエンヌを発ったのだった。彼はすりきれた木綿のビロードの上着とズボンの中で震えながら、大股に歩いていた。格子模様のハンカチにくるんだ小さい包みがひどく邪魔になったので、左右の肱でかわるがわる小脇にかかえ、東風でびしびしたたかれて血がにじみ、かじかんだ手を両方ともポケットにつっこんでいた。仕事もなければねぐらもない労働者のうつろな頭を占めるのはただ一つ、夜が明けたら寒さがいくらかゆるむだろうという希望だった。一時間前から彼はそうして歩いていた。すると、モンスーから二キロのところで、左手に赤い火が見えた。中天にぶらさがるかのように燃えている真っ赤な三つの火であった。彼ははじめ、ぎくっとしてたじろいだ。だがつぎには両手をちょっとでも暖めたいとの悩ましい欲求をおさえかねた。

くぼんだ道が下っていった。なにもかもが見えなくなった。男の右側には柵があった。鉄道をへだてる厚い板垣らしかった。他方の左側には雑草の傾斜地がずっと高まり、その上にはごちゃごちゃした松毬みたいな格好で、同じ形の低い屋根がつらなった部落かと見えるものが載っていた。彼は二百歩ばかり進んだ。するとだしぬけに道の曲がり角で火がふたたび間近に見えたが、どうしてどんよりした空の高みに、まるで煤けた月のように燃えているのか、いっそう納得がゆかなかった。だがそのとき地上すれすれに現われたもう一つの光景で引き止められた。それは重くつぶれて積み重なった一団の建造物で、そこから工場の煙突が一本のシルエットをそそり立てていた。そちこちの煤けた窓からぽつりぽつりと微光がも

れ、ものさびしいカンテラが五つか六つ外の木組みにかかっていて、木組みの黒ずんだ木を照らし、一線にならんだ巨大な架台の側面をぼんやりと見せていた。そして闇と煙にうずもれたこの奇怪な幻からは、ただ一つの声が立ちのぼっていた。目にはさっぱり見えなかったが、噴き出す蒸気の太く長い息づかいであった。

そのとき男は炭坑をそれと気づいた。だがまたしても恥ずかしくなった。むだなことさ、仕事なんかあるわけがない。彼は建物のほうに向かうかわりに、結局、ボタ山をよじのぼってみた。上では石炭の火が三つ、鋳物の籠の中で燃え、作業を照らし暖めていた。土工たちが遅くまで働いていたのにちがいない。なおも、役に立たぬボタを運び出していた。今も坑外運搬夫たちが架台の上で炭車の列を押す音が聞こえ、それぞれの焚火のそばには炭車をころがす生き生きとした人影が見分けられた。

「こんにちは」と彼はひとつの火籠に近づいて言った。

馬方が真っ赤な火に背中を向けて立っていた。紫色の毛糸のチョッキを着、兎の毛のカスケット帽（鳥打帽の一種）をかぶった老人だった。そばでは黄色い太った彼の馬が、石のようにじっと立ちつくして、その引き揚げてきた六つの炭車があけられるのを待っていた。転車機係の人夫は、痩せこけた赤髪の男だったが、あまり急がずに、ものうげな手つきで槓杆を押していた。上空では風が、冷たい北風が一段と強まり、その大きな息吹きが規則正しく、まるで鎌でなでぎりするように吹き過ぎた。

「こんにちは」と年寄りは返した。

だがそれだけで、また静かになった。男はいぶかしげな目で見られていると感じ、すぐ名前を言った。

「ぼくはエチエンヌ・ランチエという機械工だが……ここにゃ仕事はなかろうね？」

ひらめく炎に照らしだされた彼は二十一歳くらい、髪は濃い茶色で、感じのいい男だった。手足は小さかったが、がっしりした体つきだった。

「機械工の仕事なんぞ、あるもんかね……昨日も二人やってきたよ。なんにもあるわけがねえ」

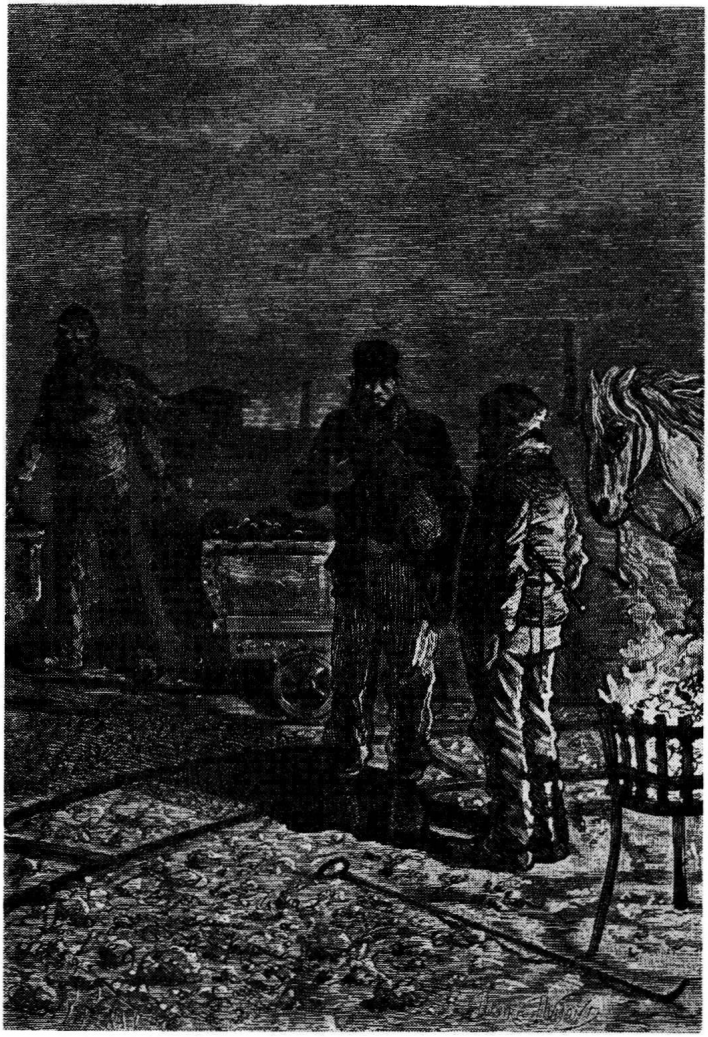
一吹きの突風が二人の話をさえぎった。エチエンヌはそこでボタ山の下に陰鬱に積み重なった建物をさして、たずねた。

「あれ、炭坑なんだろうね？」

年寄りは今度は返事ができなかった。激しい咳の発作で喉をしめつけられたのだ。それでもようやく痰をはくと痰は真っ赤な土の上にどす黒い汚点をのこした。

「そうさ、炭坑だよ、ヴォルーというんだ……そら、すぐそこが坑夫の町だ」

年寄りはそう言うと、今度は腕をあげて、青年がさきほど屋根らしいものをみとめたその部落を闇の中にさし



てみせた。だがそのとき六つの炭車が空になったので、彼はリューマチで硬化した脚をひきずり、鞭もならさずに、炭車のあとについた。すると黄色い太った馬のほうは、ひとりでにふたたび歩きだし、またも襲いかかった疾風の下で毛をさかだてながら、レールの間を重そうに引いていった。

ヴォルー坑は今や夢からさめかかっていた。真っ赤に燃える火の前で血のにじむあわれな手を暖めてうっとりしていたエチエンヌは、瞳をこらして炭坑のそちこちの部分を見た。瀝青塗りの選炭場、竪坑の櫓、広大な巻揚機室、排水ポンプの四角い小櫓など、恐ろしい角のように煙突を突っ立てて、ずんぐりした煉瓦の建物とともに、窪地の底に積み重なったこの炭坑は、人々をむさぼり食うためにうずくまった、飽くことを知らぬ意地のわるい野獣のようだった。それをつくづくながめながら、青年は自分のことを、一週間前から職場をさがしてうろつきまわった生活のことを考えた。鉄道工場で上役をなぐり、リール（フランス北部ベルギー国境に近い大工業都市）から追われ、いたるところで追われた自分をふりかえった。そして土曜日にマルシエンヌに着いたのだったが、そこでは鉄工所に仕事があると言われていたのに、鉄工所にもソンヌヴィルの工場にもなにもなかった。そこで日曜日は車輛工場の森に隠れてすごさねばならなかった。ところが、監視人に見つかって夜の二時に追い出された。もうなにもない、びた一文なく、パン屑さえない。こうして当てもなく、北風をどこに避けるかさえわからずに、街道をうろつき、これからどうしようとしているのか？　そうだ、これはたしかに炭坑だ、まばらなカンテラが石畳を照らしていた。彼は突然ひらいた扉口から、ぎらぎら輝く屋内にボイラーの焚き口をちらっと見た。そしてポンプの排気まで、あの喉のつまった怪物の吐息のような、たゆみなく吹きだす、太く長い息づかいまでをよく理解した。

転車機係の人夫は背中をまるめていて、エチエンヌのほうに目をあげさえしなかった。エチエンヌが地面に落とした包みを拾おうとしていると、苦しげに咳きこむ音が聞こえて、馬方の帰りをしらせた。満載した六つの新しい炭車を引き揚げる黄色い馬をあとにしたがえた彼の姿が、闇からゆっくりと抜け出てきた。

「モンスーには工場があるだろうね？」と青年がたずねた。

年寄りは真っ黒な痰をはき、それから風の中で答えた。

「いやはや、足りねえのは工場じゃねえ。たいしたもんだったぜ。三、四年前はなあ！　なにもかもが唸りをあげる景気でさ、人間のほうが足りなかったもんだ、あんなに儲かったことはねえ……ところが今じゃ、またバンドを締めて空きっ腹をごまかす始末さ。この辺はまった

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

く哀れなもんだよ、人はあまって放り出されとる、工場は次々と倒れてく……そりゃ、皇帝陛下の罪じゃあるめえ、だけどまたなんでアメリカくんだりまで戦争に出かけてゆくんだろうな？　馬も人間もコレラでおっ死ぬにちげえねえに」（皇帝ナポレオン三世はメキシコに一帝国を建てようという奇妙な考えをおこし、遠征軍を送って失敗した。一八六七）

そこで二人とも息を切らしながら、きれぎれの文句で愚痴をつづけた。エチエンヌは一週間前からのむだな奔走のことを話した、それじゃ、飢えてくたばっちまわなきゃならんのか？　もうすぐ街道は乞食でいっぱいになるだろう。まったくさ、と年寄りは答えた。今に具合のわるいことになっちまうだろう、こんなにたくさんなキリスト教徒を街に放りだすなんてとうてい許されることじゃねえもの。

「毎日肉にはありつけねえ」

「まだしもパンがあったらなあ！」

「まったくよ、パンだけだってありさえすりゃ！」

二人の声は聞こえなくなった。突風がもの悲しい唸りをあげて言葉を吹き飛ばしたのであった。

「そら！　あれがモンスーだ」と馬方は南のほうをふりむきながら、声をはりあげて言った。

それからもう一度手をさしのべて闇の中の目に見えぬ場所を次々とさし、それにつれて名前を言った。あれがモンスーのフォーベル砂糖工場で、まだ動いている、だがオトン製糖所のほうは近ごろ従業員を減らしたところだ、よくがんばっているのはデュティユール製粉所と鉱山用の綱索をつくるブルーズ製綱所くらいのものだ。それから大きな身振りをして北方にひろがる地平の半分をずっとさして言った、ソンヌヴィル製作所はいつもの注文の三分の二も受けていない、マルシエンヌ製鋼所の三つの高炉のうち二つだけが火をいれている、最後にガジュボワ・ガラス工場ではストライキの危険が迫っている、減俸の噂があるからだ、と。

「知ってる、知ってる」と青年はさされるたびに繰りかえした。「ぼくはそっちから来たんだから」

「わしらのほうは、今までのとこはまあまあやっとる」と馬方はつづけた。「だがな、どこの炭坑でも採炭は減っとるんだよ。そら、前のヴィクトワール坑を見な、あそこだって二組のコークス炉だけっきゃ燃えてねえ」

彼は痰をはいた。それからうとうとしている馬を空炭車につけ、あとに従ってまた出かけた。

今やエチエンヌはその地方全体を見おろしていた。闇は相変わらず深かったが、老人の手がその闇の中にひどい窮迫をいっぱいに詰めこんだかのようであった、青年はそのとき、あたり一面の果てしないひろがりの中に、無意識ながらまざまざとその窮乏を感じとった。三月の

風がこの赤裸の平野をわたって運んでいたのは、飢餓の叫びではなかったか？　嵐はいよいよ激しくなり、仕事をなにもかも死滅させ、多くの人間を倒す飢饉をもちこむかのようだった。彼は見たい気持と見る恐ろしさに悩みながら、目をそちこちにさまよわせて闇を見とおそうと努力した。だがなにもかもがはかり知れぬ闇の底に沈み、はるか遠くに高炉とコークス炉が見えるばかりだった。コークス炉は百本もの煙突を斜めに立てて、赤い炎の砲列をならべていた。一方、さらに左手では二つの塔が中天で巨大な松明のように真っ青に燃えていた。それは火事場のようなもの悲しさで、その恐ろしい地平線には、石炭と鉄の国のこの夜の火のほかにどんな星も上がっていなかった。

「あんたはベルギーの人らしいな？」と馬方がまたもどってきてエチエンヌの後ろで言った。

今度は三台の炭車しか引いていなかった。それはいつでも転車することができた。だがねじ止めがこわれ、ケージに事故がおこって、たっぷり十五分間も作業が停止しようとしていた。ボタ山の下はすでに静まりかえり、坑外運搬夫たちも車の音を長く響かせて架台をゆるがさなくなっていた。ただ鉄板をたたくはるかな槌の音だけが坑道から聞こえていた。

「いや、ぼくは南仏の者だよ」と青年は答えた。

人夫は炭車をぶちあけると、事故をさいわいに、地面に腰をおろしていた。そして無愛想に黙りこみ、おしゃべりに当惑してでもいるかのように、馬方のほうに艶のうせた目をあげただけだった。事実、馬方はいつもはそれほどあれこれ長くしゃべらなかった。たぶん他国者の顔が気に入り、打ちあけ話をしたい気持になったのだろう、そうした気持がうごめくと、老人たちは往々にしてひとりっきりでも大声にしゃべるものだ。

「わしは、モンスーの生まれで、ボンヌモール（よい死に方をする男の意味）というんだよ」と彼は言った。

「そりゃ渾名なんだろうね？」とエチエンヌはびっくりしてたずねた。

年寄りは満足そうに嘲笑った。それからヴォルー坑をさして言った。

「そうだ、そうだ……わしは三度もあそこからぼろぼろになって引きだされたんだよ、一度は毛がすっかり赤茶けちまった、つぎにゃ胃袋の底まで泥詰めさ、三度目ときたらまるで蛙みてえに水んぶくれの太鼓腹だったっけ……そこで、わしがなかなかくたばろうとしねえのを見て、奴らはわしのことをボンヌモールと名付けやがったのさ、ふざけてな」

彼は一段と陽気になって、まるで脂のきれた滑車がぎしぎし鳴るような声で笑ったが、とうとう、ものすごい

咳の発作におちてしまった。今では火籠がその大きな頭を、うすくなった白髪や、鉛色に蒼ざめ、青っぽい汚点によごれた、平べったい顔をすっかり照らしていた。体は小柄だったが、頸はでっかく、膕と踵が張り出し、長い腕の先の四角ばった手を膝におとしていた。だが、じっと立ちつくすその馬と同じように、風になやむ気配がなく、まるで岩石でできたようで、寒さも、また耳元で鳴る疾風も気にしないらしかった。彼は咳をすると、喉元を深くえぐりとられたかのように、火籠の足もとに痰をはいた。すると地面が黒くよごれた。

エチエンヌは年寄りをながめ、そのよごした土をみつめた。

「もう長いんだね？　あんたが鉱山で、働いてるのは」と青年は言った。

ボンヌモールは両腕をぐっと大きくひらいた。

「長いんだよ、うん、まったく！……わしはまだ八つにもなってなかった、その時分、そら！　ちょうどそこに見えるヴォルー坑にはいったんだ。そうして今じゃもう五十八にもなっとるんだ。ちょっと数えてみてくれな……わしゃあの中で何でもやった、手伝いからはじめて、押す力ができりゃ運搬夫、次にゃ十八年間も採炭夫さ。それからこの脚のやつのせいで土工の仲間にいれられちまい、充塡夫やら修繕夫やらをやっとるうちに、医者からくたばっちまうぞとおどかされて、とうとう坑道から出なきゃならなくなった。それでしかたなく馬方になったってわけだが、それからでももう五年になる……どうだね？　たいしたもんじゃねえか、五十年の炭鉱生活とはな、それもさ、四十五年は坑道の奥でよ！」

彼が話していると、めらめら燃える石炭のかけらがときどき火籠から落ちて、その青白い顔をぱっと真紅に照りかえらせた。

「奴らは休めと言うんだがな」と彼はつづけた。「わしのほうにその気がねえんで、奴らはわしのことをとんだ間抜けだと思うとる！……だがわしは六十になるまで、まだ二年は達者にやって、百八十フランの年金をもらうつもりなんだ。今日にでもさよならすりゃ、すぐさま百五十フランの年金はくれるだろうがね。奴らも抜け目がねえや、畜生め！……だけどとにかくわしはまだ丈夫だよ、ただ脚は別だ。そら、水が体の中にはいっちまったんだ、切羽で水につかりすぎたせいさ。ちょいと脚をうごかしたって悲鳴をあげる日があるよ」

彼はまたも咳の発作で言葉をとぎらせた。

「じゃそのために咳も出るんだね？」とエチエンヌが言った。

しかし相手は激しく頭をふって否定した。それから口がきけるようになると、

「ちがう、ちがう、風邪をひいたんだよ、先月。前には咳なんどしたこたあなかったんだが、今じゃもうとりつかれちまってどうにもならねえ……それに、おかしいのは痰が出ることだ、痰が出ることだよ……」

えぐるような発作が喉の奥からこみ上げてきて、彼はまた黒い痰をはいた。

「そりゃ血かね？」とうとうエチエンヌは思いきってたずねてみた。

ボンヌモールはゆっくりと手の甲で口をふいた。

「石炭だよ……骨の中にしこたま詰めこんどるんで、死ぬまで暖まれるってわけだ。坑内にゃもう五年も足をいれてねえ、こりゃ知らねえうちに貯めこんどったもんらしい。ちぇ！　これならうんと長持ちするよ」

話がとぎれた。規則正しくたたきつける鉄槌の音が遠く坑内でひびいていた。風が暗闇の奥から起こる飢餓と疲労の叫びのような嘆きをあげてすぎていった。とまどいゆらめく炎の前で、老人はさまざまな思い出を噛みなおしながら、声をひくめて話しつづけた。彼と家族が採炭に従事したのは、むろん、つい昨日からのことじゃない！　一家はモンスー炭鉱会社のために創立のはじめから働いてきた。しかもそれはずいぶん昔のことで、もう百六年も前のことだ。そのころ十五歳の小僧だった彼の祖父ギョーム・マユがレキャールでねばりのいい石炭を見つけた、それが会社の最初の炭坑となり、ついで古くなって今日あのフォーベル砂糖工場のそばに廃坑となっているのである。そのことはこの辺ではだれ知らぬ者はなかった、発見された炭層が、祖父の名をとってギョーム層とよばれていたことで明らかだ。彼は祖父を知らなかった。ひとの話だと太った逞しい男だったが、六十歳のときに老衰で死んだ。ついで父ニコラ・マユ、別名ルージュは、ようやく四十歳くらいのときに、当時掘っていたヴォルー坑で埋没した。落盤があり、完全にぺちゃんこになって、骨も血も岩石にのみこまれてしまったのである。その後彼の二人の叔父と三人の兄弟もまた同じようにそこに屍体をのこすことになった。ところで彼、ヴァンサン・マユは、脚の調子をいためただけで、ほぼ完全に坑道から抜け出したわけで、抜け目のない男とみられていた。だがしかし、何をしたらいいのか？　とにかく働かねばならないのだ。しかもこの一家は、ひとがほかのことをしたように、父から子へとこの仕事だけをやってきたのだ。そこで今では彼の息子のトゥーサン・マユがそこでくたばりかかっていた。それから目の前の坑夫町に住む孫たちも仲間もみんなそうだった。百六年も掘りつづけたんだ。子は親をつぎ、同じ親方のために。どうだい、旦那方だってたいていはこれほどうまく来歴を語るわけにゆくまい！

「食えさえすりゃ、まだいいさ」とエチエンヌがふたたびつぶやいた。
「それこそわしの言うことだ。食べるパンがあるかぎり、生きてゆかれるってもんだものな」
ボンヌモールは目を坑夫町に向けながら、口をつぐんだ。そこではほのかな光が一つずつ点いていった。モンスーの鐘楼で四時が鳴り、寒気がいっそうきびしくなった。
「ところで金持なのかい、あんたの会社は？」とエチエンヌがまた言った。
年寄りは肩をそびやかしたが、ついでくずれ落ちるお金の山に圧しつぶされでもしたかのように、また肩を落とした。
「ああ、そうとも、ああ、そうとも……隣のアンザン会社ほど金持じゃなかろうがね。それにしても途方もねえ大きな財産さ。数えきれるもんじゃねえ……炭坑が十九もあり、そのうちヴォルー、ヴィクトワール、クレーヴクール、ミルー、サン・トーマ、マドレーヌ、フートリー・カンテルなど十三が掘り出し中で、六つはレキヤールみたいに排水か通風用になっとるんだ……それから労働者は一万、鉱区は六十七もの町にひろがり、出炭は毎日五千トン、鉄道が全部の炭坑と仕事場や工場をつないでるってわけさ！……ああ、そうとも、ああ、そうとも、いくらでもあるんだ、金なんぞ！」
架台の上の炭車の響きが黄色い大きな馬の耳をたてさせた。下ではケージがなおったらしく、坑外運搬夫たちがまた仕事にとりかかっていた。馬方はふたたび下ってゆくために馬をつけながら、馬にやさしく話しかけた。
「おしゃべりに慣れるんじゃねえぞ、のらくら野郎！おまえがなんで暇っつぶしをやっとるかエンヌボーの旦那がお知りになったら、ことだからな！」
エチエンヌはすっかり考えこんで闇をみつめていた。それからきいた。
「じゃ、エンヌボーさんのもんなんだね、この炭鉱は？」
「いいや、エンヌボーさんは総支配人をやってなさるだけさ。わしらと同様、給料をもらっとるんだよ」
青年はちょっと体を動かして広大な闇を示した。
「じゃ、いったいだれのもんだね。この全体は？」
だがボンヌモールは、また始まった激しい発作で胸をふさがれ、しばらくは息をとりもどせなかった。それでもとうとう痰をはき、唇のどす黒い泡をふきとると、一段と強まった風の中で言った。
「ええ？　この全体はだれのだって？……そんなことわしらにもわかるもんかね。いろんな旦那方のもんさ」
だが彼は手をあげて、闇の中のぼんやりした一点を、そのいろいろな旦那方の住むずっと奥まった知られない

場所をさした。マユの一家は彼らのために一世紀以上も前から炭層をたたきつづけてきたのである。しかも彼の声は一種の宗教的な恐れをおびた。それは、彼らすべてがみずからの肉をささげながらかつて一度も見たことのない神が、食に飽き足りてうずくまりひそんだ、近づきがたい神殿のことでも話していたかのようであった。

「パンが腹いっぱい食べられさえしたらなあ」とエチエンヌは、これといった脈絡もなく、だしぬけに三度くりかえした。

「そりゃ、そうさ！　いつでもパンが食えりゃ、そんなうめえこたあねえ！」

馬はすでに出発し、馬方もつづいて傷兵みたいなたどたどしい足どりで消えた。転車機のそばの人夫はびくっとも動かず、両膝のあいだに顎をうずめて毬のようにちぢこまりながら、艶のうせた大きな目をうつろな空間にそそいでいた。

エチエンヌはふたたび包みをとりあげたが、まだ立ち去らなかった。さかんな火の前で胸は燃えるように熱かったが、背中は突風に洗われて凍ってゆくのが感じられた。とにかく炭坑に話してみるのがよかろう、老人は知らないのかもしれない、それにもうあきらめていた、どんな仕事でも引き受けよう。失業で飢え餓えたこの地方を通って、どこへ行き、何になろうというのか？　迷い犬みたいに骸骨を塀の後ろに捨てようというのか？　そうは思ったが、しかしある躊躇で心が乱れた。それはつまり深い夜闇の下に埋もれた、この広々とした平野の真ん中のヴォルー坑への恐怖であった。風はあたかもたえず拡大する地平のはてから吹きつけられるかのように、突風の一吹きごとに増大してゆくように思えた。死に絶えたような空にはまだ一筋の暁光もささず、高い熔鉱炉だけが、コークス炉とともに暗黒を真紅にそめて燃えさかっていた、しかし未知なるものを照らし出してはくれなかった。ヴォルー坑は穴の底に意地のわるいけだものみたいにとぐろを巻き、さらに一段と身を沈めて、人肉の苦しい消化になやむかのように、いっそう太く長い息吹きで呼吸していた。

二

二百四十号の坑夫町は小麦と甜菜畑の真ん中で真っ暗な闇につつまれて眠っていた。背中合わせの小住宅の四つの広大な集団が、同じ広さの庭に区切られた三本のひろびろとした並木道にへだてられて、兵営か病院の集団みたいに幾何学的に平行してならんでいるのが、うすぼんやりと見分けられた。そして人気のない台地の上では、囲いの塀からひきちぎられた組格子の中で、突風がさびしく鳴るのだけが聞こえた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo